



ココロを育む総合フォーラム 2025年度 活動報告書





こころを育む 総合フォーラム より

「こころを育む総合フォーラム」は、日本人のこころの荒廃に危機感を抱き、それにはどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。日本人のこころのありようについて討議を重ねた結果、2007年に未来を担う子どもたちのためにできることを提言にまとめました。提言では、家庭・学校・地域・企業のそれぞれの立場から子どもたちのこころを育むためにできることを「問い」のメッセージとして呼びかけています。

2008年、この提言内容を全国にムーブメントとして広げていくことを目的に、子どもたちの“こころを育む活動”を応援する全国運動を始めました。毎年、全国各地で取り組まれている“こころを育む活動”を募集。際立った活動について表彰し、広く紹介しています。

2019年、鷲田清一を座長に新たな体制で第二期をスタート。現地で活動の取材をするなど、より現場に寄り添った運営・推進を展開しています。

本書が“こころを育む”環境づくりのための取り組みのヒントになり、活動の輪がさらに広まるきっかけとなれば幸いです。

活動の 経緯

- 2005年 「こころを育む総合フォーラム」発足
学界、経済界をはじめ各界を代表する16名のメンバーで発足
- 2007年 「提言書」を発表
- 2008年 全国キャラバン、子どもたちの“こころを育む活動”の募集・表彰を開始
- 2011年 トヨタ財団・パナソニック教育財団「東日本大震災支援共同プロジェクト」
- 2013年 特別対談企画「日本人としての教養～次世代に継承したいこと」
(東洋経済オンラインとの共同企画)
- 2015年 フォーラム活動10年特別シンポジウム開催
- 2017年 全国運動10年記念表彰式開催
- 2019年 「第二期 こころを育む総合フォーラム」をスタート
鷲田清一座長を中心に新たなメンバー11名でスタート
- 2026年 フォーラム設立20周年記念イベント
「こころをつなぐフェス ～はじめてのドーソーカイ～」開催

提言書

家庭・学校・地域・企業の4つの分野で、子どもたちのこころの育みのために大人たちができることを、自己の内心に向かって問いかける「七つの問い」の形で呼びかけています。

具体的には、家庭に向けて「親（保護者）の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか」、学校に向けては「教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか」など、4分野それぞれに対して「七つの問い」を提案しています。

提言書の詳細は、「こころを育む総合フォーラム」ホームページでご覧いただけます。

<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/phase1/message/>



フォーラムの
目指す姿

家庭・学校・地域・企業などで取り組まれている「子どもたちの“こころを育む活動”」を通して、子どもたちに持ってほしい“3つのこころ”をバランスよく育むことを目指しています。

子どもたちに持ってほしい

“3つのこころ”

自分に向かう
“こころ”

自立心や自尊心を確立し、
人間らしさや自分らしさを
理解するこころ

社会に向かう
“こころ”

さまざまな価値観を尊重し、
社会と自分の関係性を
理解するこころ

他者に向かう
“こころ”

人と人とのかわりを大切
にし、他者を思いやり、
傷つけないこころ

こころを育む総合フォーラム メンバー



座長

鷺田 清一
大阪大学 名誉教授



入江 杏
文筆家・
ケアミーツアート研究所代表・
上智大学グリーンケア研究所
非常勤講師



小国 綾子
毎日新聞ジャーナリスト



工藤 啓
認定NPO法人育て上げネット
理事長



玄田 有史
東京大学
社会科学研究所 教授



鈴木 みゆき
國學院大学人間開発学部
子ども支援学科 教授



高際 伊都子
渋谷教育学園
渋谷中学高等学校
校長



堂本 晃代
パナソニックホールディングス株式会社
企業市民活動担当室
室長



増田 明美
スポーツジャーナリスト、
大阪芸術大学 教授



山極 寿一
総合地球環境学研究所
所長
前京都大学総長

2025
年度

子どもたちの“ところを育む活動”表彰式

第1部



2026年2月6日、霞山会館（東京都千代田区）にて2025年度「子どもたちの“ところを育む活動”表彰式」を開催いたしました。フォーラム設立20周年の今年度は、昨年を上回る261件のご応募があり、書類選考、現地調査などの厳正な審査の結果、高い評価を得た7団体を表彰いたしました。表彰式後には《第2部》として、20周年記念イベント「ところをつなぐフェス～はじめてのドーソーカイ～」を開催。これまでの受賞団体にもご参加いただき、受賞年の枠を超えた楽しい交流企画で盛り上がりました。

🏆 主催者挨拶

当財団は昨年50周年を迎え、ICT教育の支援では全国の累計で換算して約10%となる延べ約3,600校に助成を行いました。また、20周年を迎えた総合フォーラムでは18年間で約2900件余りのご応募から146件を表彰しました。今回は261件のご応募から厳正な審査のうえ7件を表彰いたします。表彰式後には、過去の全国大賞受賞者と今回受賞された方々との交流を深め、さらに地域(横)の広がり、次世代(縦)へのつながりを作る機会を設けております。表彰が飛躍への一歩となりますように、今後のご活躍を期待しております。



パナソニック教育財団
理事長 小野元之氏

🏆 来賓祝辞

本日は誠におめでとうございます。受賞された取り組みはいずれも、地域や民間団体が協力し、さまざまな形で子どもたちのところを育む素晴らしい内容だと感じました。次代の社会を担う子どもたちには、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越えて豊かな人生を切り拓く、持続可能な社会の作り手となることが求められています。

少子化やデジタル化が進むなか、皆様の実践は、今後さらに重要になると考えており、受賞を機に活動が一層発展していくことを祈念しております。



文部科学省 総合教育政策局
社会教育振興総括官
神山弘氏

🏆 各賞の発表・表彰

各団体の活動を動画でご紹介した後、特別賞2団体、優秀賞4団体、全国大賞の順で表彰。各団体の代表より、受賞の感想が伝えられました。

今回の全国大賞は、少年少女を対象にした民間の更生保護施設〈風の家〉が受賞。施設では、子どもたちの行動の背景にあるところの課題に着目し、「応答」によって理解と支援を行っています。さらに、住居・就労の支援によって自立準備を整え、安全で丁寧な支援環境を提供しており、これらの点が高く評価されて受賞に結び付きました。

受賞に際し、臨床心理士として日々少年たちのところの動きに向き合う浅田慎太郎理事長は「大賞を受賞できたことに驚き、大変光栄に思います」と喜びを語り、「少年たちと過ごす日々は、体力・気力において消耗することも多いけれど、問題行動などのなかには少年たちの『苦悩に手を差し伸べてもらいたい』という希望が託されています。その視点を失わずにこれからも活動していきます」と今後にかける思いを語りました。



🏆 フォーラムからの祝辞

当フォーラムが2019年から使用しているキャッチフレーズの「これも教育、あれも教育」とは、何かを教え育てることではなく「そこにいたら、子どもが勝手に育つような場を作る活動」だと考えています。そのことを最近少し違う角度から考える機会がありましたので、お話ししたいと思います。



座長 鷺田清一氏(大阪大学名誉教授)

大人になるとは、どのようなことなのか

デザイナーの原研哉という方が「身長が伸びなくなって、人はようやく大人になる」と、おもしろいことを言われています。この言葉は、肉体的な成熟(大きさ)のことを言っているのではなく、「成長したい」と思っている間はまだ大人ではないことを意味し、いろいろなことを考えさせてくれます。

成長期の子どもは、「将来どんな人間になりたい」「こんな家族を持ちたい」と、自分が近未来のために今何をしないといけないか、で頭がいっぱいです。

しかし、大人になるとは「自分が何をしたいか」よりも、祖先が土地を耕し、交通を整備し、憲法にあの一項を入れてくれたから、今元気でがんばれているというように、前の世代に受けた恩恵をご恩や贈り物と思えるようになることだと思います。現世で恩を受けると恩返しをしますが、祖先への恩返しはできないので、受けた恩は次の世代や別の場所にいる人たちに送るか、回すしかない。このような「恩送り・恩回し」とは、未来世代の人が私たちにどうしてほしいかを想像しながら、何をなすべきか考えるということです。

どうしたら良き祖先になれるのか

イギリス在住の文化思想家、ローマン・クルツナリック氏は「どうしたら未来世代の人にとって良い祖先になれるかを考えていきましょう」という思考を著書に示し《グッドアンセスター(良き祖先)》と表現しています。また、台湾のパンデミック時にソーシャルメディアを使って効率的な対策を行った世界初のデジタル担当大臣、オードリー・タン氏もこの言葉を使っていて、世界中にこの思想は浸透しています。

『グッドアンセスター』の本では、島根県浜田市にある《未来局》の職員について、自分たちの意見ではなく、未来世代の思いや希望を想像し、議会で代弁していることが紹介されていて、面白い発想だなあと感じました。

皆様の素晴らしい活動は、《未来局》のように、どうしたら良き祖先になれるかという取り組みの一つだと受け止めています。活動が全国に知られ、広がっていくよう努力いたしますので、皆様もますます活動を広げていただければと思います。本日はおめでとうございます。

- ① 全国大賞 特定非営利活動法人 風の家【広島県】
- ② 優秀賞 一般社団法人 グリーフサポートせたがや【東京都】
- ③ 優秀賞 瀬田東国際交流クラブ【滋賀県】
- ④ 優秀賞 特定非営利活動法人 福岡津屋崎子ども劇場【福岡県】
- ⑤ 優秀賞 いしがき少年少女合唱団【沖縄県】
- ⑥ 特別賞 NPO法人 絵本による街づくりの会【滋賀県】
- ⑦ 特別賞 さい子ども会【岡山県】



当フォーラムの20周年を記念して開催した「こころをつなぐフェス」では、これまでの受賞団体が受賞年度の枠を超えて「つながる」ことを通して新たな出会いや新たな価値観の創出にチャレンジしました。

過去の全国大賞受賞団体とフォーラムメンバーによる 共同プレゼンテーション

全国大賞

2019年度

社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会 (大阪府)
+ 堂本 晃代氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

あなたも私も笑顔になる～子ども福祉委員～

阪南市内の小中学生が「子ども福祉委員」として地域の課題解決に取り組むボランティア活動です。当日は、初期から参加している大学生委員が自ら手がけた企画を紹介するなど、キーパーソンの成長と子どもを支える温かい環境が伝わる発表でした。



全国大賞

2020年度

特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター (島根県)
+ 鈴木 みゆき氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

げきじょっこまつり 初めての買いもの

44年続く、子どもによるおもちゃのリサイクルフリーマーケットです。発表では、バザーの仕組みやエピソードを詳しく紹介。子どもの率直な感想や主体性が育つ様子、口出し禁止で見守る大人の気持ちを実感たっぷりに伝えられました。



全国大賞

2021年度

一般社団法人 ^ポンテ とやま (富山県)
+ 小国 綾子氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

ごちゃまぜの中で育つ ～つながる・まなぶ

個人宅のカフェを拠点に、不登校や発達凸凹、健常を問わず、あらゆる子どもたちが「ごちゃまぜ」で交流する居場所づくり活動。当日は、生きづらさを抱えてカフェを訪れ、子どもたちとの交流を通して元気を取り戻した若者たちが自らの経験を語りました。



全国大賞

2022年度

島根県奥出雲町立高尾小学校 (島根県)
+ 入江 杏氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

愛されて十年 ちっちゃな小学校の全校落語

全校生徒5名の極小規模校による「こども寄席」活動。学校での発表会のほか、高齢者サロンや各種イベントに協力し、豊かな表現力が育まれています。発表では、小学校が閉校した後、転校先にも落語クラブを作り、活動が継続されていることが伝えられました。



全国大賞

2023年度

横浜市立南吉田小学校 (神奈川県)
+ 高際 伊都子氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

国籍を超えて笑顔で結びつなげよう南吉田

外国籍等児童が全校の6割を占める同校では、児童会を中心に多様性を尊重する学校づくりを展開。当日は、児童会が作り上げたビデオで120周年の取り組みが紹介されました。個別支援学級や障がいのある子、外国籍の子も一緒に作った力作でした。



全国大賞

2024年度

美容師交流会・美容師ボランティア団体 One Step (千葉県)
+ 工藤 啓氏 (フォーラムメンバー)

活動テーマ

継続はチカラになり、カタチになる

美容師団体による児童養護施設でのボランティア・カット活動。動画での活動説明や参加者の声を紹介したほか、子どもたちのこころの居場所となっているOne Stepの美容師のお店でのヘアカットを卒業後も支援するための募金が呼びかけられました。



交流企画「自らのころを育もう！」

ランダムに分けたグループでやりたいことを決め、その場で実行するフリータイム。和気あいあいにおしゃべりしたり、昭和のおもちゃで遊んだり。笑顔あふれるひとときになりました。



ころをつなぐフェス閉会の挨拶より

私は40年以上ゴリラの研究をしてきました。ゴリラは離乳時すぐ硬いものが食べられますが、人間は乳歯で過ごす4年があり、保育園や幼稚園で親以外の人から食事もらって育ちます。人は自然界では弱みとも言える部分を、受け入れられる自己肯定感をもとに人への影響を学んで成長できる強みに変えたのです。思春期には、少し年上で同性の子がサジェスションをするなど、サポートする人は年齢で変わり、期間が長い。だからこそ、人間の子どもはいろんな個性を持って育ち、いろんな働きができるわけです。それが、人間がおせっかいにも教育を始めた理由だと思います。だから、皆さんの活動は決して無駄にならないはず。また、ゴリラの子どもは手足を失い、体が麻痺しても挫折せず、ありのままに生きていく。私たちは、それぞれ違う子どもたちを、違うなりに育てるのが喜びではないでしょうか。本日は、いろいろと話を聞いていて、そのことを強く感じました。



山極 壽一 総合地球環境学研究所所長、前京都大学 総長 (フォーラムメンバー)

第3部 交流会

受賞年度を超えた交流が実現。
楽しく賑わう会場で、たくさんの貴重なつながりが生まれました。



乾杯の言葉で会場を沸かせた、瀬田東国際交流クラブの田中優宇君



オンライン表彰式だった2020年度・2021年度受賞団体の方々をようやく対面でお祝いできました。



フェス・交流会を盛り上げた司会の名コンビ
フォーラムメンバーの
玄田有史氏(右)と
当財団の山田育生氏(左)



受賞団体 活動紹介



特定非営利活動法人 風の家【広島県】

非行というものがきに、応答という支援を

選考理由

少年たちの非行や問題行動の背景にある心の課題に着目し、「応答」による理解と支援を行っている点が非常に特徴的な活動です。住居や就労支援を通じて自立準備を整え、安全で丁寧な支援環境を提供していることも高く評価されました。



活動の概要と目的

少年の「非行」という叫びに寄り添い、背景にある心理的課題の解決と自立を支える

民間の更生保護施設で、住居提供、就労支援、福祉支援申請（生活保護受給の手続き、障がい者認定の取得）の補助など、自立に向けた総合的支援を行っています。少年院などの矯正施設を出たり、家庭での引き受けが難しい少年の委託先として、少年たちを受け入れています。施設内で寝泊まりし、自立の準備を整えることが目標。少年たちはほぼ100%何らかの逆境の養育環境を経験しています。家庭内での暴力、性的問題、ネグレクトなど、様々な被害体験を持っていて、そのような環境の中で生きていくために、犯罪的な方法を身につけていくケースも珍しくありません。窃盗や暴力などの非行というものがきを通して、苦悩や生きづらさを社会に伝えています。表面的に捉えるのではなく、その行動を起こした心の問題にアプローチすることが必要です。問題行動の背景にある心理的課題への「応答」を重視し、単なる制裁ではなく、行動の意味を理解し、適切な支援を行っています。



4階で食事が提供されます。3階、4階が宿舎で、個室と二人部屋があります。食事の提供、仕事の紹介、住居探しなど社会生活を始めるまでの移行を支えています。



自由に立ち寄り顔を合わせ、話せる談話スペース。社会生活移行後も就労訓練や居場所を提供し、フォローアップを続けています。

子どもたちの変化・成長

- 身寄りがない、親からの引き受け拒否、環境を断ちたいという状況で入所してくる子が多く、少年院を出た後、元の家に戻ることは困難な場合が、ほとんどです。委託期間中に逃げ出す子もいて、その後の消息がわからなくなることも。一方で退所後「仕事に就いたものうまいかないとき」など、相談に来てくれる子もいます。

参加者の声

先生方に仕事や私生活の相談ができるので、ありがたいです。自立の心配についても、親身になって聞いてくれます。気をつけて過ごしたいと思います。(16歳少年)

風の家に来る前は、今後の見通しなんてありませんでした。これからどうしたらいいのか、わからなくてしんどかった。話のできる先生がいるので、いい感じで過ごせています。(17歳少年)

子どもの面倒を見てくれるので、助かっています。どうしても一緒にいたらお互い冷静になれないですから。サポートしていただけるのが、ありがたいです。(少年の親)

いろんなスタッフが、ひとりの人間として少年たちと関わっています。非行少年に対しても偏見なくフラットに関心を寄せることができていると感じます。(大学生のアルバイト)

若い人からお年寄りまで、いろんな年代がいての集団生活なので、大変なときもあります。自立できるように頑張ります。(施設入所者)

いつも職員が笑顔でかかわってくれるので、こちらも自然と笑顔になれます。作業所、施設がみんなの大事な居場所になっていると思います。(作業所利用者)

今後の課題と未来の方向性

委託として入ってくる少年や成人の数が一定ではないため、多い時は満員になりますが、少ない時は2、3人になり赤字になってしまいます。収入面と支出面の両方に課題があり、無駄な契約やリース料の見直しなど支出面でも改善を図っています。今後の課題としては、地域貢献のために風を家の活動を学校や関連施設に紹介する機会をつくることを模索中。

活動の特長

困っているのは、他ならないあなたなのではないですか

単なる反応（レスポンス）ではなく、非行や犯罪の背後にある動機や求めているものに対して、応答することが重要という考えです。表面的な行動だけでなく、その行動を起こした心の問題にアプローチすることが必要なのです。例えば、暴力的な女子に対して「暴力に困っているのは、他ならないあなたなのではないか」と問いかけるような応答が大切だと考えています。犯罪や非行は「行動の病」であり、それを病態化させているのは心の問題なのです。



「風の家」で行われている餅つきイベント。年末年始に餅をついて近隣の人に配り、挨拶回りをします。

何かがあっても対応できる24時間常に人がいる体制

施設内で寝泊まりし、ほかの利用者とともに共同生活をします。最大で15人程度が生活し、3か月を目途に自立に向けた準備をしますが、一年半ほど滞在する場合もあります。非常勤スタッフが、ほとんど夜勤を担当。大学の非常勤講師、ビル管理者など多様な人材が担っています。常勤スタッフは主に日中勤務で、月に1回程度夜勤に入ることもあります。常に対応できる環境であることが重要な支援の土台になっていると考えています。



餅つきだけではなく、緑日を開催し「スーパーボール」すくいなどをを行った年も。地域に温かく、受け入れてもらっています。

町内会の清掃活動の参加ほか、お餅つきなど地域イベントを開催

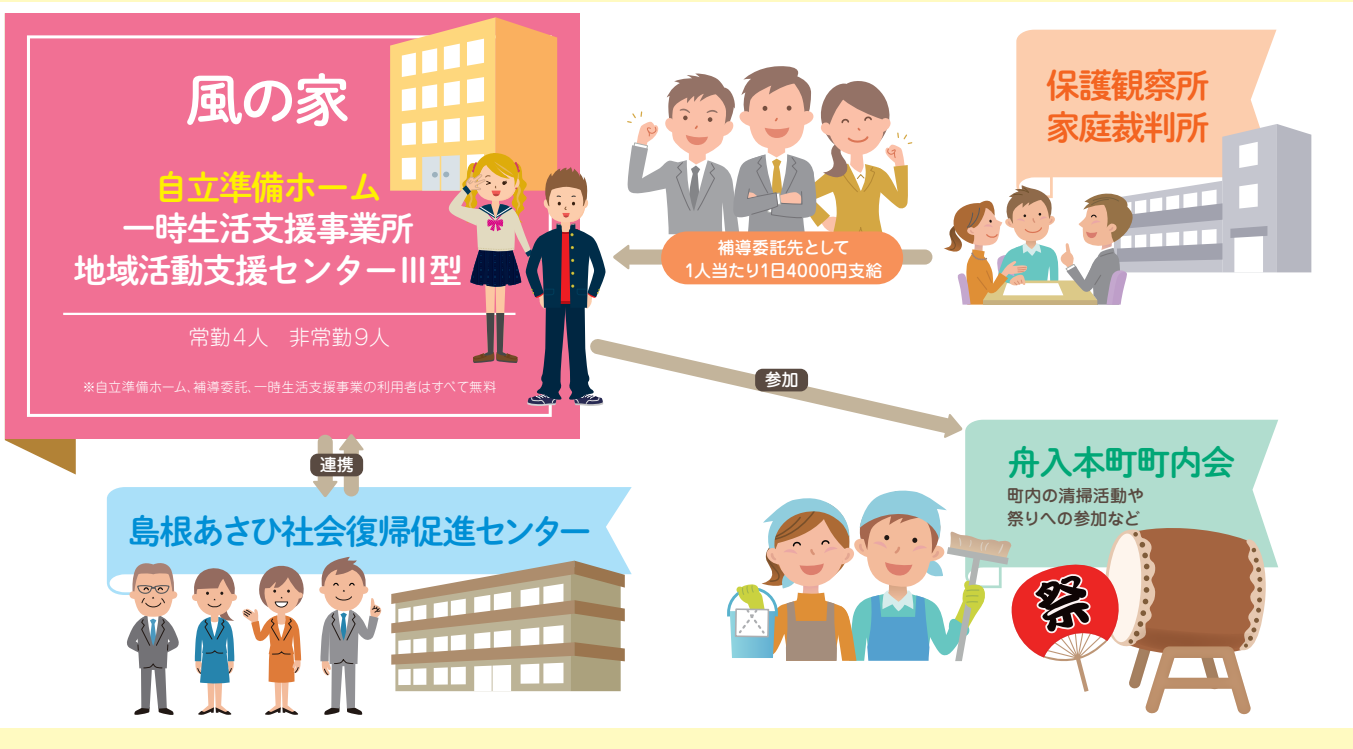
社会的な孤立を防ぐとともに、地域の人も実情を知ってもらっています。風の家自体でも餅つきイベントなどを開催。かつての利用者が退所後、家族をつくって、子どもを連れて餅つきイベントに参加することもあります。また、地域の祭りへの参加、町内会の清掃活動などを行ってきました。市民からの相談窓口も設置しており、相談に応じることもあります。地域との関係構築をさらに強化する必要性を感じています。



紙垂（しで）と呼ばれるギザギザに切られた白い紙を、神楽の通る道に吊るします。

活動の広がり

2009年マンションの一室から始まり、2011年には家庭裁判所の補導委託先として登録されました。2012年に現在の4階建ての建物に移り、試験観察中や保護観察中の少年や、刑務所から出所した元受刑者に一時的な生活の場を提供しています。



連絡先

- 所在地：〒730-0843 広島県広島市中区舟入本町17-8
- E-mail：buratto-hiroshima@wine.ocn.ne.jp ●ホームページ：https://kazenoie.jp/wp/
- 代表者：浅田 慎太郎（理事長）



一般社団法人 グリーフサポートせたがや【東京都】 「わたしもだいじ あなたもだいじ」を育む

選考理由

子どもたちが安心して「泣ける・話せる」環境で感情を表し、同じ経験を持つ仲間と出会うことで「一人じゃない」ことを実感しています。非判断や秘密保持などの安全なルールの中で、自分の力で回復していくプロセスを尊重している点が評価されました。



活動の概要と目的

ピアサポートを通じて、一人ひとりの中にある力が大切にされ、ありのままでもいられる居場所

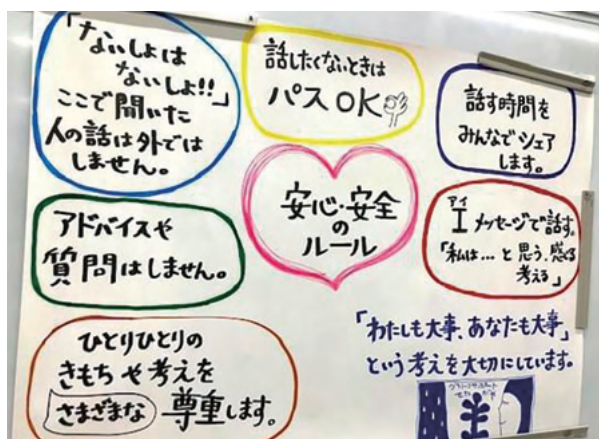
米国のダギーセンターのやり方を学んだスタッフを中心に「自分たちが暮らす地域にも、ダギーセンターのような場所が欲しい」と始め、2014年に「サポコハウス」の運営を開始しました。同じ経験を持つ子どもたちが集い、おしゃべりや遊び（ピアサポート）を通して、参加者が自分自身の力でグリーフと向き合います。グリーフとは、身近な人や大切なものを失うほか、いじめ、暴力、離別、親からの引き離し、夢や希望の喪失など、多様な体験に対する心身の反応のこと。いろいろな気持ちになったり、思うように動けなくなったりするのは、自然なことです。自分のペースで自分の経験に触れられるような、安心・安全な場づくりを大切にしています。学校や病院、葬儀会社の紹介など、いろいろなところから情報を得て、訪れてくる人もいます。月に1回行われる子どものサポートプログラムのほかに、大人向けのプログラムや一対一の個人相談、電話相談、誰でも参加できる講座やワークショップで、鍼灸やヨガなども行っています。

子どもたちの変化

目に見える成果を求めるのではなく、安心できる環境の中で、子どもたちが自分の気持ちに触れながら、それぞれのペースで過ごすことを大切にしています。子ども自身が「もう来なくていい」と感じたときが一つの卒業のタイミングです。一方で、必要なときには「また行きたい」と戻ってくることもできる場所でもあります。



身近な人と死別した子どもが（大人も）、安心して自分の気持ちに触れられる場所は日本には不足しているという認識があり、2014年「サポコハウス」を開始。



プログラム中は、おもちゃやゲーム、絵を描いたり、本を読んだり、おしゃべりしたり自由に過ごします。何もしなくてもOK。自らのグリーフに触れる機会・時間を持ちます。

参加者の声

今を生きる子どもたちとともに、安心して自分らしくいられる場をつくることで、私の中の小さな子どもも元気をもらっています。

(ファシリテータ)

子どもたち自身も持っているちからに支えられてきました。グリーフを抱える子どもたち一人ひとりに（必要なサポートが）広く届いていくことを心から願っています。

(ファシリテータ)

初めて参加されるお子さんも、何度も通われる子どもも、その時の自分がやりたい遊びや活動を自ら選び、時間を過ごせるよう安心安全な場づくりを心がけています。

(ファシリテータ)

安心・安全に過ごすことができる場であるために大切にされていることがたくさんあることがわかりました。

(ファシリテータ養成講座の参加者)

自分のことを見つめ直す、知り直す、学びの時間にもなりました。気づかないうちにカチコチに固まっていた頭と心をやわらかくさせてくれる、分かち合いの場でした。

(同講座参加者)

安心して楽しんでいられることに驚きました。これからはグリーフを抱えながら、気持ちのアップダウンがあつていいんだと自分に言いながら前へ進んでいけそうです。

(同講座参加者)

今後の課題と未来の方向性

活動は収益を目的としていないため、運営には外部からの支援（補助・寄付）が欠かせません。今後は「グリーフ・インフォームド」な関わり方を子どもたちの周囲の大人にも広げ、理解の輪を広げていきます。また、参加した子どもたちが将来支え手となるような、グリーフサポートが循環する仕組みを育てていきたいと考えています。

活動の特長

「わたしもだいじ あなたもだいじ」を軸に参加者の安全を確保します

同じ境遇の子ども同士が集まることで「自分は一人じゃない」と感じることができます。ピアサポートの力を最も重視。共感を通じて、自然な形で癒しや励ましが生れます。①パスの選択（話したくないとき、答えたくないときは「パス」を選んで話さなくてもよい）②秘密保持（グループで聞いた話や見たことは、保護者を含め他言しない）③ノンジャッジ（非判断）などのルールのもと「あるがまままでいられる場所」の提供が理想。



サポコハウスに来ることで「死別体験をしているのは自分だけじゃない」と感じることができます。

始まりの輪と終わりの輪を設け、間は自由な活動時間

始まる前に時間（始まりの輪）を設け、ルールを確認。誰が死んだのか（自分の親など）をみんなと話し、「ここは死別体験をした人が来るところなんだ」と認識します。プログラムが始まれば一時間半の間、何をしてもOK。自らのグリーフに触れる機会・時間を持ち、コントロール感を取り戻します。ファシリテータも子どものほうから求められない限り、アドバイスや質問はしません。終了の「終わりの輪」で、気持ちを切り替えて日常に戻る準備をします。



対象年齢は3歳から。定員約5人。小学生ぐらいまでは、保護者と一緒に来てもらうようお願いしています。

ファシリテータ養成講座を開催し、スタッフを養成しています

子どものプログラムに参加するスタッフを養成しています。養成講座受講者は、会社員をはじめ医療職、福祉職、教員と様々。サポートをするために必要な考え方やスキルについて学び、修了生がファシリテータとなります。現在の登録者は約80人。プログラムでは子ども1人につきファシリテータ1人を配置し、子どもが安心して参加できるような場づくりをします。プログラムの間、保護者は別室で、子どもとは別のプログラムに参加しています。



プログラムでは、子どもに主導権を委ねて、ともに時間を過ごします。

活動の広がり

子どもたちが「わたしもだいじ、あなたもだいじ」という関係の中で安心して過ごせる場を広げています。死別だけでなく、離婚や別居などにより親と離れて暮らしている子どもたちのグリーフにも目を向け、新たにグループを始めました。さらに、地域の里親子支援団体と連携し、里親家庭が抱えるグリーフに焦点を当てた里親向けワークショップも開催しています。

第1日曜 おとなのサポートプログラム (19歳以上)

第2日曜 パートナー死別サポートプログラム

第3土曜 キッズ&ティーンズのサポートプログラム

サポコラボ
鍼灸やヨガ、映画上映、アート作品を作ったり、カフェを開いたりしています。



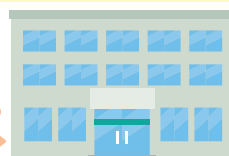
グリーフサポートせたがや
「サポコハウス」

一対一の個別相談や電話相談(月3回)も

協力

補助

協力



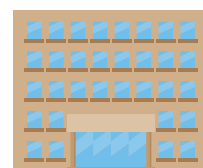
世田谷区



協力

地域の
里親子支援団体

出張講座



民間団体や公的機関

全国の
グリーフサポート団体

●所在地：〒154-0004 東京都世田谷区太子堂5-24-20-201

●E-mail: griefsetagaya@yahoo.co.jp ●ホームページ: https://www.sapoko.org/

●担当者: 松本 真紀子

連絡先



瀬田東国際交流クラブ【滋賀県】

世界の文化をみんなでワクワク体験しよう!

選考理由

多文化の子どもたちが主体となり、得意を活かし合うことで自信を伸ばし、学校では発揮しにくい力を解放できる点がこの活動の良さです。無理しない、背伸びしない活動を通して、家族ぐるみの理解と絆が深まり、地域全体で学び合い支え合っている点が評価されました。



活動の概要と目的

世界の文化を学びあう、家族ぐるみのワクワク体験が国籍や世代を超えた絆を育んでいます

外国にルーツを持つ子どもたちと地域の子供たちが力を合わせ、さまざまな国の歌や料理、お花やダンスなどのイベントを開催しています。子どもたちは、得意なことを活かして先生役を務めるほか、企画からチラシ作り、進行、後片付けにいたるまで主体的に取り組んでおり、家族や仲間と協力し、学びあいながら親交を深めています。始まりは2015年、同じ幼稚園の保護者同士が母国の料理や文化で交流を深める会でした。次第に、その集まりに子どもが参加し、コロナ禍を機に活動自粛に危機感を覚えた子どもたちが、主体的に活動をリードするスタイルに変化。やがて国際交流に関心を持つ誰もが参加できるクラブとなり、参加者の出身国は16か国に及びます。クラブは自分が「やってみたい」「誰かに伝えたい」と思うことに挑戦でき、自己肯定感を高められる場となっています。また、家族ぐるみで参加できることで、家族の理解や協力が成長の支えになっており、世代間の交流も深まっています。



ペルー出身の家族(母・息子・娘)が発案し、先生探しや体験レッスンを経て実現した「ペルーダンスの会」の様子です。白いハンカチは、愛と平和を象徴。



外国籍の親たちの「日本の歌を知りたい」という要望に応え、「お歌の会」を実施。日本人も日本文化を見直す良い機会になりました。

子どもたちの変化・成長

- ⇒ コロナ禍による活動自粛が子どもたちの自主性を引き出すきっかけとなり、現在では交流会の企画から進行、後片付けにいたるまで子ども主体となって進めています。進行や先生役を務めて人前で発言するなど、クラブでの経験が自信となり、学校でも積極的に行動できるようになっています。

参加者の声

野菜嫌いの娘はブラジルのコロケでパクチーが、モンゴルのサラダでビクルスが食べられるように。異文化交流の力は偉大です。
(大阪からたびたび参加/3児の母)

皆さんとモンゴル料理を分かち合えて本当に光栄でした。私たち家族にとって忘れられない一日となりました。皆さんの温かさや友情に感謝します。
(モンゴル料理担当/小学3年生・父母)

私は、お母さんとおばあちゃんと参加しています。いろんな国のお料理と一緒に作って食べることがとても楽しく、ずっと続けていきたいです。
(副会長/小学4年生/日本)

クラブは多くの人を幸せにしていると思います。継続していくことによって、世界と繋がる一歩になれば良いと思います。
(会長/小学6年生/日本)

皆さんの家族のような温かい応援があったからこそ、息子は自信を持って役割を果たせたと嬉しく思っております。
(中国の書道を担当/小学6年生・父母)

ステキで重大な活動だと思えます。日本の皆さんと他国の文化を学び、ブラジル料理やダンスを披露できて良かったです。感謝でいっぱいです。
(ブラジル料理・ダンス担当/中学1年生・父母姉)

今後の課題と未来の方向性

外国籍の人たちに教えてもらうことは数多くあります。「日本人がホストで外国籍の人がお客様」といった関係性でなく、今後も活動を通して互いに学び合うプロセスを構築していきたいと考えています。大切にしているのは、イベントに参加して終わりではなく、クラブでの交流が挨拶や声かけなどの日常的なつながりへ発展していくこと。ゆくゆくは「国際交流」と名付けなくても自然に交流できる社会の実現を目指しています。

活動の特長

みんなが学び、みんなが先生になる お客さん扱いされない心地良さ

「世界のために寄せ植えを」「ブラジルコロッケ作りと謎のクリスマスパーティ」「ペルーのマリネラで平和の汗を流そう」など、子どもたちは得意なことや個性を生かしながら、世界の文化が学べるワクワク体験を企画しており、準備から当日の進行、後片付けまで主体的に取り組んでいます。クラブは、日本人が外国籍の人たちをもてなす場ではなく、「みんなが生徒であり、先生にもなれる」心地よい空間になっています。



花屋さんになる夢を持つ小学4年生が、寄せ植えの先生に。「お花の魅力を伝えたい」と、がんばりました。

人前で得意なことを披露 輝く個性が自信となり、成長の糧に

外国にルーツを持つ子どもにとって、母国の言葉や文化を披露することに気後れや不安が生じる場合があります。しかし、クラブ参加を機に「やってみよう」「誰かに伝えたい」ことに挑戦でき、得意分野を教える立場を経験することで、自己肯定感が高められています。人前で発表するために、一生懸命に日本語で教える方の練習をし、興味をもって聞いてもらえたことで自信が付き、いろんな場面で挑戦する勇気や意欲がわいています。



「韓国料理会」では小学6年生とその兄、母がメインになって「チヂミ」と「トック」の作り方を教えました。

家族ぐるみの参加で 理解も絆も深まっていく

家族ぐるみの参加が多く、家族内に共通の話題や人脈ができ、地域での絆も生まれています。人前で発表する子どものために練習に付き合うなど、発表を成功させようと家族が協力することで、家族内の結束が強まっています。このような家族の理解や協力は子どもたちの励みになり、継続を後押ししています。また、参加者の国籍が多様であるとともに年齢層が幅広いため、国際交流だけでなく世代間交流の場ともなっています。



クラブで7年を共にしたモンゴル出身家族との「さよなら会」です。ここでの思い出や経験、絆が今後の支えに。

活動の 広がり

2015年、クラブの代表が、同じ幼稚園に通う外国籍の保護者たちと母国のご飯や文化を通じて交流する会をスタート。コロナ禍以前は大人や日本人がホストとなるイベントが多かったのですが、コロナ禍による活動自粛が子どもたちの自主性を引き出し、子どもたちの声に動かされる形で地域の公民館に繋がり、クラブの参加者層が広がりました。



連絡先

- 活動場所：滋賀県大津市
- E-mail：kaekotsushima@gmail.com
- 代表者：津島 佳絵子（代表）



特定非営利活動法人 福間津屋崎子ども劇場【福岡県】

子どもの成長に本当に大切なことを活動に

選考理由

舞台鑑賞や体験活動を通じ、子どもたちが主体的に表現し、遊び、学べる環境を作っています。権利条約の学びや事前事後の工夫で感動を成長に結びつけ、長年にわたる活動で地域ぐるみの支え合いと循環型子育てを実現している点が評価されました。



活動の概要と目的

観劇やキャンプでの感動を生きる力に変える 地域ぐるみの子育てを実現しています

劇や音楽の舞台を生で楽しむ〈生の舞台鑑賞〉と、仲間とともに遊び・創る〈生の体験活動〉を柱とした多彩な活動を展開し、子どもたちの豊かな感性と生きる力を地域ぐるみで育てています。

〈生の舞台鑑賞〉では、役者や鑑賞仲間と交流しながら感動を表現し、作品にちなんだ体験を通して感動を生きる力に変えています。また〈生の体験活動〉では、キャンプを中心にした遊びのなかで主体性や助け合いの精神、学校とは違う関係性が生まれ、第三の居場所になっています。さらに大人も、子どもの権利の学習会や各種活動に参加し、地域での孤立防止や子育て支援につながっています。

子ども劇場は1966年に福岡で生まれ、全国に展開。福間津屋崎地域でも、子どもの権利条約の視点を大切に「子どもが主体的に関わり、自分を表現でき、自由に遊べる」環境を作り続けてきました。その長年に及ぶ継続は参加者から支援者を生み、循環型の子育てを実現しています。



鑑賞後には、交流会で出演者に質問したり、仲間と感想を語り合ったりと、おすすめの舞台について発表する機会があり、表現力が磨かれています。



小学4年生以上が参加する(子どもキャンプ)は、中学生のリーダーを高校生・青年がサポート。自主性を培い、仲間と協力しつつ成長します。

子どもたちの変化・成長

- 青年とキャンプに行った幼い子が成長し、子どもたちを連れていく側で参加するといった循環が見られます。
- 本や例会のおすすめを語る会では、最初は紙を読み上げる子や一人で発言できない子も、次第に企画から積極的に参加し、自分の意見を言えるようになっていきます。

参加者の声

たのしかったことがいえるから、さいごのかんそうをいうのがいい。

(例会に参加/5歳)

皆で魚を食べたのがうれしかった。おいしかった。楽しかった。

(事後活動「おさかなをたべよう」に参加/年長)

1歳から参加した息子も小学1年生。今ではカレンダーに子ども劇場の予定が書きこまれ、生活の一部となっています。

(活動を通しての感想/小学校低学年の親)

小さい頃から幅広い作品に触れてきた。舞台を観ることは自分を見つめなおさせ、大きく成長させてくれる、なくてはならないものだ。

(舞台鑑賞について/小学校高学年)

初めての子どもキャンプは少しドキドキしました。遊んだり、ご飯を作ったり、みんなで踊ったり、とても楽しかったです。

(キャンプに参加/小学校高学年)

ほかの参加者親子と過ごす時間を通して、地域の一員として悩みや楽しみを共有しながら一緒に子育てをしているのだと感じています。

(活動を通しての感想/乳幼児の親)

今後の課題と 未来の方向性

子どもをとりまく状況と子どもの権利条約を原点に、子どもが安心して自分を出すことができ、こころのよりどころとなるような居場所づくりに力を入れていきたいと考えています。これまで積み重ねてきた活動を大切に継続しつつ、常に子どもの声を聞きながら活動をつくっていきます。また、子どもにとって本当に必要なことを学ぶ大人の学習会を地域に広げ、劇場の良さを伝えながら、仲間を増やすことも目指しています。

活動の特長

生の感動を成長につなげるための 事前・事後の活動が充実

舞台鑑賞前には塗り絵のフラッグを配布し、当日持参してもらって会場を飾るなど、鑑賞前にはこころの浸透圧を上げる活動で期待感を盛り上げます。事後活動では、例えば演奏会「ロバの音楽座」の後、空き箱など身近な物で楽器を作って演奏するなど、舞台の感動を成長につなげ、楽しい体験に発展させています。また、キャンプで同行する青年たちと子どもたちは、当日までにいろいろな活動を通して関係づくりを行っています。



鑑賞後の活動として、『バームクーヘンとヒロシマ』の舞台上に登場したバームクーヘン作りを体験しました。

『子どもの権利条約』の視点を大切に 大人も学び、活動に反映

母親たちの「子どもの権利条約の内容を学びたい」という声に応え、講演会や勉強会を定期的実施。実際の活動においても「子どもには失敗する権利も休む権利もあり、遊ばないと育たない。喧嘩ができるって大事だね」と確認し合いながら、権利条約の視点を反映させていきます。また、他団体と連携して福津市に働きかけた「子どもの権利条約の制定」が市議会を通過。今後は、詳細の内容にも関わっていきたくと考えています。



子どもが主体的に動き、表現し、遊びをつくれる環境を大切にしています。写真は手作りの品を釣る店です。

長年にわたって子ども劇場が育んだ 街ぐるみ文化と子育ての絆

子ども劇場は1966年に福岡で生まれ、全国へ展開。県内には18の団体があります。福岡津屋崎子ども劇場は、県内の団体と連携しながらも個性的で自由な取り組みを行い、観劇交流やキャンプ、育児サポートなどにより移住者の孤立を防いでいます。この文化的な教育環境づくりは長く継続され、街ぐるみで支える子育てを実現しています。さらに、参加者が成長して支援側に回る循環型の支援を地域に根付かせています。



本を自分の言葉で紹介する<この本おすすめ!!>は、22年継続中。回を重ねながら個性や価値観も成長しています。

活動の 広がり

1966年、福岡で生まれた子ども劇場の活動は全国へ広がり、県内には18団体が誕生。福岡津屋崎子ども劇場は1980年に前身団体が設立され、2001年にNPO法人である現体制になりました。2005年には二つの町が合併し、人口が増加。移住者を含め核家族化が進むなかで、孤独な子育てに危機感を持ち、地域でつながる子育てができるよう活動を続けています。



舞台鑑賞／年間5作品

わくわくどきどきを大切に

体験活動

事前・事後活動

事前 舞台を楽しむためのワークキットを配布し、期待感を高める

事後 劇団との交流会「この例会おすすめ」でおすすめの舞台について発表。舞台にちなんだ体験、物作り・料理・運動など

乳幼児 お膝にだっこで初めての舞台鑑賞

小学校低学年 友達と一緒に鑑賞

小学校高学年

思春期

青年期

大人

おすすめの舞台について、表現を工夫して伝える

質問や感想を人に伝える

- ◎絵本作家によるおはなし会
- ◎勝手にあそぼう会
- ◎子どもサークル
- ◎子育て講演会
- ◎メディア学習会
- ◎思春期の子をもつ親の交流会
- ◎サークル活動
- ◎4つの子育てサロン さまざまな乳幼児活動
- 子どもと青年のキャンプ 3泊4日小4～
- ハイキング うんどう会など 小3～
- ・ドラマスクール
- ・中学生の居場所、旅企画

子どもの権利の学習会

連絡先

- 活動場所：〒811-3305 福岡県福津市宮司4-20-25
- E-mail: ftkodomo@crux.ocn.ne.jp
- ホームページ: <https://www.fukutsu-kodomo.com/>
- 代表者: 秦 泉 (代表理事)



いしがき少年少女合唱団【沖縄県】

「わらべ歌から世界の名曲まで」歌い継ごう

選考理由

沖縄、石垣の歌を通して故郷の歴史や文化を学び、仲間と楽しく歌う中で自己肯定感や表現力を育んでいます。国内外での演奏旅行で文化を発信し、友情や使命感を感じながら成長できる、長年継続されている点が評価されました。



活動の概要と目的

ふるさとの文化や歴史を歌声にのせて国内外で披露
大切に歌い継いでいます

石垣市を拠点に活躍している日本最南端の少年少女合唱団です。小学生から高校生までの男女で構成され、週2回の練習で楽しく技術を磨いています。

2019年にはスイスへ、2023年には北海道へ演奏旅行に出かけるなど、国内外問わず素晴らしい歌声をたくさんの方々へ届けており、音楽を通じて交流しながら友情を深めています。毎年、沖縄県で慰霊の日に制定されている6月23日には、石垣市全戦没者追悼式ならびに平和祈念式で『月桃』の曲を披露し、戦没者を追悼しています。特に戦後80年を迎えた2025年は、平和を願う歌をたくさん歌いました。また、石垣市出身の作曲家である宮良長包の曲など、大切な歌を使命と誇りをもって歌い継ぎ、聞く人のところに響かせることで未来へ残しています。

33年続く活動を通して多くの子どもたちが故郷の歴史や文化を学び、発信することで自信をつけ、友情とともに自己肯定感を育んでいます。

子どもたちの変化・成長

国内外の舞台に立つことで大切な歌を歌い継ぐという使命感、達成感、自己肯定感が生まれ、演奏旅行での経験が、その後の自信や支えとなっています。また、個々の技術と全体での調整力、ところに響かせる表現力が磨かれ、互いに補い調整し合う協調性も育まれています。



1992年より33年間、沖縄県・石垣市に伝わる大切な歌が子どもたちの美しい歌声で歌い継がれてきました。写真は第50回沖縄県少年少女合唱祭の様子。



スイスへの演奏旅行では、ホームステイで現地の生活や文化にふれつつ交流を深めました。写真は、チューリッヒ・エンゲ教会で歌った際の記念の一枚です。

参加者の声

ほくは沖縄本島で歌うことが楽しいです。学校ではみんな同じように歌っているけど、ほくはきれいな声で歌っています。

(小学5年生)

私は宮良長包作品が好きです。特に「鳩間節」のメロディが好きです。

(小学6年生)

私は歌によってアルト・ソプラノ・メゾソプラノとパートが変わります。パートの人数も変わるので、バランスを考えながら歌っています。

(中学3年生)

小学5年生の時に行ったスイスの教会は響きが素敵で、歌っていて楽しかったです。

(高校2年生)

スイスの皆さんが石垣島に来て同じ舞台上で演奏したり、沖縄本島や稚内などで他の合唱団と交流したり、一緒に歌うことはとても楽しいです。

(高校3年生)

住んでいる地域で歌うことも楽しいですが、稚内などの県外に行く、その地域のことも知ることができるので、演奏旅行に行くことが好きです。

(高校3年生)

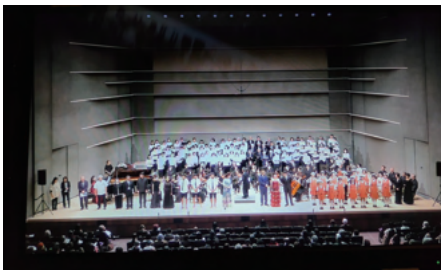
今後の課題と未来の方向性

2024年は北海道稚内市へ演奏旅行に出かけ、戦後80年を迎えた2025年には平和を願うコンサートに参加しました。コンサートや練習の様子は、ユーチューブやインスタグラムで発信しており、これからも子どもたちのがんばる姿や美しいハーモニーを一人でも多くの方に届けたいと願っています。また今後は、団員を増やす努力をしつつ日々の練習に励み、引き続き県外・海外のコンサートに参加する予定です。

活動の特長

沖縄県石垣市だからこそ歌い継ぐ歌がある

沖縄県には、戦争の歴史や美しい故郷への思いを語る名曲があり、作者不明ながら誰もが知っている曲も存在します。これらの歌は、歌い継がれることで次の世代に伝えられてきました。子どもたちは「歌は歌い継がれて初めて生きる」ことを学び、その存在意義やメッセージを感じながら舞台上立っています。石垣市出身の作曲家である宮良長包の作品はもとより、一曲一曲に愛着や誇り、使命感を感じ、大切に歌い継いでいます。



石垣市出身の作曲家、宮良長包の生誕140年記念音楽祭で歌声を披露しました。(那覇文化芸術劇場なはーと)

歌う喜びと伝える使命を胸に成長する子どもたちとの33年

練習では、仲間と楽しく歌いながらも故郷の歴史や文化を伝える歌詞をしっかりと届けるために、子音を意識して発音しています。また、パートごとの音色や重なり合いのバランスを図るなど、美しいハーモニーと説得力を持つ歌声に日々磨きをかけています。来場者から感謝や感動を伝えられることで、達成感や自信につながっています。33年の継続により、親子で合唱団の経験を持つ家族もあり、地域に根付いた活動になっています。



戦後80年を迎え、平和を願って歌いました。写真は「ひめゆり八重山展」(石垣市役所)での歌唱風景。

国内外への演奏旅行で沖縄文化を広め、交流を深める

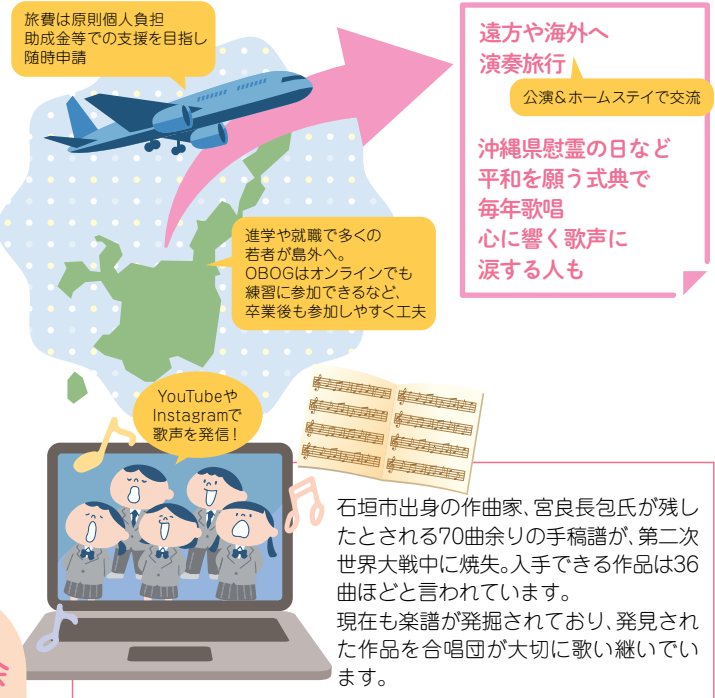
沖縄県や石垣島に伝わる歌を、県外および世界へと広く発信した経験が、子どもたちの自己肯定感を高めるとともに、アイデンティティ形成に影響を与え、豊かな個性が培われています。演奏旅行では、歌を通して沖縄の文化を披露する使命感や達成感が生まれ、訪問先の文化も学びながら交流を深めています。また、現地でのホームステイや仲間と舞台をつくり上げていく経験を通して、自立心や自主性も引き出されています。



演奏旅行の経験が成長の糧になっています。スイスとの国交樹立160年記念コンサートの様子。(石垣市民会館)

活動の広がり

1992年、小学校の音楽専科教諭だった砂川氏が前身団体から指導を引き継ぎ、石垣市教育委員会の運営で活動を開始。その後任意団体となり、高木氏が会長に就任し、裏方まで全力で支援。砂川氏は国内及びハンガリーで勉強を重ね「わらべ歌から世界の歌まで歌えるように」と33年間指導を続け、合唱団は国内外で順調に活躍の場を広げています。



連絡先

- 所在地: 〒907-0021 沖縄県石垣市名蔵1-235
- E-mail: kabira-bay@nifty.com ●ホームページ: https://www.instagram.com/ishigaki_chorus_bg/
- 代表者: 高木 理恵(会長)



NPO法人 絵本による街づくりの会【滋賀県】

絵本で豊かな心を育み、笑顔があふれる街に

選考理由

里山の自然を五感で体感しながら、絵本の世界に入り、感性や自己肯定感を育てている点が大きな特徴です。季節の体験や読み聞かせを通して愛情を実感でき、絵本で育んだつながりが、成長後の地域への循環につながっていることも評価されました。



活動の概要と目的

里山の景色と絵本がつくり出す世界にふれることで子どもたちは笑顔になり、感性が磨かれています

里山に息づく豊かな自然のなかで絵本とふれあい、五感を刺激する「出会い・体験・感動」を通して、子どもたちのこころを豊かに育む活動です。2004年から21年間、絵本の原画展や読み聞かせのほか、さまざまな形で絵本の世界を体験する活動を展開してきました。

例えば、春は絵本『よもぎだんご』をテーマに、〈里山体験隊〉の活動として里山を散策した後でヨモギ団子を作るなど、季節やテーマごとに楽しめる企画を用意。〈絵本の広場〉では、子ども食堂や児童館に絵本が読めるコーナーを設け、また学校での読書支援も行っています。活動には、小学生を中心に、母親と乳幼児も多数参加。絵本を手にみんなが笑顔になります。本に描かれた世界に興味を持ったり、読み聞かせに愛情を感じたりしながら日々感性が磨かれ、そのとき感じた季節の匂いや味は、本とともにふるさとの思い出になっています。さらに、成長した参加者が活動を手伝うなど、活動が育んだ絆が支援につながる機会も生まれています。



小学校で開催した原画展で、真剣に説明を聞く子どもたちの様子です。金尾恵子氏より「活用してほしい」と2作品24点の原画が提供され、実現しました。



「春を見つけて遊ぼう」をテーマに実施した〈里山体験隊〉では、絵本『よもぎだんご』（福音館書店）をもとに、子どもたちが夢中になって団子を作りました。

子どもたちの変化・成長

原画展の際、子どもたちは絵本の原画を見ながらお話を聴き、ストーリーと絵のつながりを認識し、絵に対する興味が引き出されています。また、小学生になると絵本に対して好き嫌いが出てきますが、人に読んでもらうことで本を敬遠せず、嬉しい表情や笑顔が引き出されています。

参加者の声

初めて田植えをしました。がんばって植えたので、おいしいお米ができてほしいです。しゅうかくが、とても楽しみです。
(田植えに参加/小学5年生)

獲った魚を炭火で焼いて食べたり、すいか割りをしたりと、夏を満喫できました。カレーやアイスキャンデーもあり、子どもが好きな食べ物がいっぱいでした。
(川遊びに参加/保護者)

深く気持ち良かったし、暑かったからちょうどよかったよ。カレーおいすぎておかわりした！
(川遊びに参加/子ども)

本田哲也さんの原画展に参加して、先生の生きものに対する愛あふれるお話が聴けてよかったです。
(原画展に参加/保護者)

草花を絵本で調べ、絵本を読んでもらって知ったことがたくさんあった。大人も学べるのがたくさんあると実感した。
(里山体験隊に参加/保護者)

本と合唱のコラボは初めてで、とても豊かな気持ちになりました！おはなしに興行きがでて最高ですね。
(絵本と音楽で楽しむコンサートに参加/大人)

今後の課題と未来の方向性

主力である正会員の高齢化により、活動内容に制限は出てくるものの、今後も今まで通り細く長く活動を継続していきたいと考えています。課題は世代交代ですが、20年前に活動に参加していた子どもたちが成人して手助けをしてくれる場面も出てきています。これまでもイベントの一部を他団体と分担するなど、工夫しながら活動してきました。今後も引き続き、活動を通じた地域での協力体制の構築が期待されます。

活動の特長

絵本の世界を、ふるさとの自然のなかで体験できる

豊かな自然に恵まれた高島市マキノ町を拠点に、子どもたちが絵本という芸術にふれる機会を創り出しています。絵本の世界が目の前に広がるように、季節に彩られた景色や匂い、味、音などが五感を刺激する体験は、絵本の好き嫌いや苦手意識に関わらず、誰もが楽しめます。子どもたちは、里山の自然を感じながら絵本にふれることで、こころの豊かさが育まれるとともに、ふるさとを印象的に胸に刻んでいます。



琵琶湖畔の桜の下でおはなし会を開催。絵本は将来、ふるさとの景色や感動を呼び起こすタイムマシンにもなります。

絵本は芸術への入口となり、愛情を実感する機会をつくる

子どもたちにとって、絵本は初めて出会う芸術作品です。刺激を受けたり、感動したり、愛着を感じながら、成長に寄り添う存在でもあります。絵本の読み聞かせや原画展に参加して絵やストーリーに興味を抱き、その世界観を体感するうちに感性が磨かれ、芸術を愛するこころが育まれています。一方、大人の手の上でだっこされて絵本を読んでもらう体験は、愛されているという実感を子どもたちにもたらし、自己肯定感や自尊心を高めています。



「絵本カバーでエコバッグを作ろう」などのワークショップがあり、楽しみながら表現力が育まれています。

無理せずコツコツ21年 絵本でのタネまきを継続

絵本と出会い、原画にふれ、自然と融合した世界を体験するなかで、子どもたちは感性を磨き、感動はこころに残ります。成長した子どもがタイムカプセルのように当時の状況や感情を思い出すとき、その感動は会話や行動となって花開き、周囲に感動のタネをまくといった循環が期待できます。活動は、出会いに恵まれ、コツコツと21年継続。たくさんの子どものこころに絵本から生まれる芸術と愛情の実りをもたらしています。



「絵本と音楽で楽しむコンサート」は、赤ちゃんから高齢者まで参加可能。絵本の世界を歌声とともに体感できます。

活動の広がり

2001年、滋賀県高島市へ移住した理事長夫妻が、絵本作家との出会いなどを経て、元々好きだった絵本の店を開業。当時始めた書店内での読み聞かせが、営業活動と混同されることもあり、絵本の魅力を伝えたいとNPOを設立しました。21年間の実績により地域での認知度は高まり、協力団体も増えました。近年は複数の賞を受賞し、さらに知名度が高まっています。



連絡先

- 活動場所: 〒520-1812 滋賀県高島市マキノ町西浜953番地17
- E-mail: ehon2004city@gmail.com
- 代表者: 平松 成美 (理事長)



さい子ども会【岡山県】

「今」だからこそ地域をつなげる子ども会

選考理由

地域の子どもたちが立場や背景を越えて自然に混ざり合い、多様な体験や交流を通じて成長できる場をつくっています。負担の少ない仕組みで誰でも参加しやすく、継続的な居場所づくりが子どもと家庭を温かく支えている点が評価されました。



活動の概要と目的

心理的・物理的な敷居を極力低くし 地域全体で子どもを育てる仕組み

「子どもはもちろん、大人も一緒に楽しむ」ことを心がけ、参加者全員にとって有意義で楽しい時間になるよう企画しています。中学、高校生も参加可能。地域活動から離れがちな年代も歓迎することで、多様な交流の場を創出しています。運営や活動を工夫することで、人数は約20人から100人に増えました。生活保護世帯、一人親家庭、不登校など、社会的・経済的な課題を抱える子どもたちに対し、地域における「緩やかなセーフティーネット」としても機能しています。自閉症など障がいのあるお子さんでも、例えば、兄弟のうち一人が障がい児だと、親はその子につきっきりになり、ほかの子は「ほっときつ放し」という状態になってしまう。子ども会での参加ならば、みんなでケアしてあげて、一般の子と自然に交わる機会ができます。子ども会という枠組みを維持することで、支援が必要な子とそうでない子が混ざり合う「らしさ」を守っています。



新1年生である必要はなく、同級生に「わたしも入りたい」といった子がいるときには、年度途中でもどんどん声をかけていきます。



中、高校生向けの居場所兼子ども食堂みたいな「ゆるまるスペース」を公民館で開始。不登校や悩みを抱えていても参加しやすく、適切な相談相手とつなぐことが目標。

子どもたちの変化・成長

- ⇒ プログラムに参加した子どもからは、それまで意見を聞いてもあまり答えてくれなかったのが、感じたことや考えたことを教えてくれたり、意見が返ってくるようになりました。皆で活動を共にすることで「誰かが必ず気にかけてくれる」という環境が自然に生まれ、子どもたち同士や大人による緩やかな見守り合いの輪ができます。

参加者の声

「子ども会で好きなことは？」「プラレール!!」
(年長・5歳児クラス)
色々なお友達と遊ぶ！近くに駄菓子屋さんがあるみたいで楽しみ！
(小学3年生)

姉や兄と一緒に赤ちゃんの頃から参加していた子ども会。夏祭りで自分たちがお店を企画したり、作ったご飯をみんなで食べたり、やりたいことをかなえています。
(中学生)

フリースペースや島企画で子どもたちと関わって、一緒に遊んで、はしゃいで…毎回ほんとに楽しい時間。子どもたちの笑顔に元気をもらってます！
(ボランティアの大学生)

泊まりで島へ行った時は、大人もカヌーを漕いだり、海へ一緒に入ってはしゃいだり。色々な世代やバックグラウンドの方と和気あいあいできるのは、子ども会のおかげです。
(保護者)

子ども会では、お出かけも経験できて。私一人では難しいですが、支援していただき本当にありがたいです。いつか返せたらいいなと思っています。
(保護者)

地域との関わりを持てること(どうしても閉鎖的な環境という場合もあるので)。子どもたちにとっていい経験になっていると思っています。
(児童養護施設の職員)

今後の課題と 未来の方向性

2025年度から中学生、高校生向けの居場所兼「子ども食堂?地域食堂」みたいなことを第4土曜日に始めました。中学生になって学校に行きづらくなった子が地域に2人いて「ご飯作るから手伝って」という形にすれば声かけやすいのではないかと。そういう子は、まだ来てくれてはいないのですが(2025年11月時点)活動を続けていきます。

活動の特長

地域社会や自然と触れ合い、創造力を育む体験活動を重視

電動車椅子ユーザーを含む人たちと一緒に瀬戸内国際芸術祭(直島)を巡る「車椅子チャレンジ」や漁業体験、犬島での環境学習・海岸清掃など、多様な活動を企画。体験プログラムについては、未就学児には保護者の付き添いが基本的に必要ですが、小学4年生以上は子どもだけで参加できます。体験活動費や交通費などには、岡山市の助成金を使用しています(プログラムによっては1000円程度の参加費が必要な場合もあります)。



小学4年生以上は子どもだけで参加可能。それより下の学年で保護者が来られないときは、誰かが代わりにします。

毎月第4日曜日に フリースペースを定期開催

地域住民が利用する集会所を無料で利用し、異年齢の子どもや大人と交流できる「継続的な居場所」を提供。駄菓子屋さんごっこなどを行っていて、第三の場所として、思い立ったとき気軽に立ち寄れる環境を整えています。学校や家庭以外に「子どもを見守り育てる地域の目」があることを感じ、異なる世代や価値観に触れることができます。大学生や社会人のボランティアに手伝ってくださる方がいるので、保護者は見守り要員として参加。



150円分の駄菓子券や現金を100円までしか使えないルールなど、経済的な知識や自己管理能力を育む教育も行っています。

保護者の方に役員をお願いすることはありません

役員の義務付けをなくし年会費も不要に。助成金などを活用し、参加費の「敷居は低くしたい」と考えており、経済的な理由で参加を諦めることがないように努めています。ボランティアや保護者に対し、固定の当番制ではなく「来られる人は手伝ってください」という原則を徹底。参加可能な人が無理なく活動に関われる体制を維持しています。体験プログラムについては、親御さんは家庭の都合に合わせて、不参加でも構いません。



ただ拾うだけでなく「なぜここにそのゴミがあるのか」「どんな種類が多いのか」と問いを投げかけながら行いました。

活動の 広がり

50年の歴史があった子ども会でしたが「1年交代で役員を押し付け合う」という義務的な当番制(順繰り制)で運営されており、負担感から組織が徐々に腐れていく状況にありました。入会理由で一番多いのが、親の負担が少ないこと。役員しなくていいですよって言ってきたことで、会員数が20人から101人(2025年時点)に増えました。「コロナで遊ぶところがなくなったね」と言っていたところから、子どもの元気がなくならないように維持していく、というのが原動力。



※行事は、2024-25年に実施されたもの。ほかにクリスマス会、新年会、6年生を送る会、お泊り会、子ども発案の「政治家と子ども達との質問・懇談会」などあり。

連絡先

- 所在地: 〒703-8247 岡山県岡山市中区さい東町2-1-10
- E-mail: sai.kodomokai@gmail.com
- ホームページ: <https://sai-kodomokai.jp>
- 代表者: 泉 明佳



美容師交流会・美容師ボランティア団体 OneStep (千葉県)

テーマ **継続はチカラになり、カタチになる**



美容師ならではの高いコミュニケーション力と子どもたちとの間に築かれたナナメの関係性が、子どもたちに癒しや希望を与えている点が大きく評価されました。このようなプロボノ活動が増えていくことが期待されます。



横浜市立南吉田小学校 (神奈川県)

テーマ **国籍を超えて
笑顔で結びつなげよう南吉田**



外国籍とつながりがある子どもが全校の54%を占めている同校で、中心的役割を担う児童会が「笑顔で結びつなげよう南吉田」を合言葉に、多言語あいさつ運動や国際読書会など多様性を尊重する様々な活動を行い、思いやりの心を育てています。



島根県奥出雲町立高尾小学校(島根県)

テーマ **愛されて十年
ちっちゃな小学校の全校落語**



全校生徒5名の極小規模校での「子ども寄席」の活動。学校の定期発表会の他、高齢者サロンなどの福祉施設で防災、交通安全、小児がん対策などの募金イベントに協力。子ども同士が支え合いながら、地域の交流を生み出し、元気つけています。



一般社団法人 Ponteとやま (富山県)

テーマ **ごちゃまぜの中で育つ～つながる・まなぶ**



特定非営利活動法人 おやこ劇場松江センター (島根県)

テーマ **げきじょっこまつり 初めての買い物**



社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会 (大阪府)

テーマ **あなたも私も笑顔になる～子ども福祉委員～**



特定非営利活動法人 パノラマ (神奈川県)

テーマ **高校内居場所カフェ
～先生でも親でもない大人がいる、文化的シャワー提供の場～**



長野市立城東小学校 (長野県)

テーマ **共に学ぶ長野ろう学校との41年目の交流活動
～共生社会の形成に向けて6年間の継続交流～**



和歌山県立熊野高等学校 Kumanoサポーターズリーダー部 (和歌山県)

テーマ 地域に根ざし、地域に貢献する高校生リーダーを目指して



鹿角市立八幡平中学校 (秋田県)

テーマ 郷土愛を育み、人間関係力を培う八幡平ボランティアガイド



仙台市立南吉成中学校 (宮城県)

テーマ 大震災から学び、前に進む力を培う、復興支援活動と防災教育



熊本市立出水南小学校 (熊本県)

テーマ 小学校と支援学校の子どもたちが学び合い、成長し合う交流活動



東中ファミリーサポーターズ・東中地域活性隊 (兵庫県)

テーマ 地域・学校・家庭と生徒たちによる循環型の地域活性活動



石樽の里コミュニティ (三重県)

テーマ 地域全体で子どもを守り育てるための学校と地域による組織づくりと協働活動



特定非営利活動法人 オバパト隊 (熊本県)

テーマ 高齢女性パトロール隊による、安心安全な子育て環境づくり



山形県立置賜農業高等学校演劇部 (山形県)

テーマ 農業高校の視点から、食を伝える食育ミュージカル



公益社団法人 群馬県助産師会 (群馬県)

テーマ 子どもの自己肯定感を育む「いのちの講座」

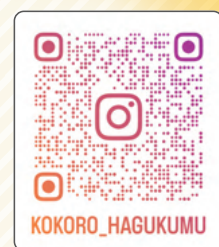
公式Instagramを開設しました。



「子どもたちの“こころを育む活動”」の受賞活動のご紹介や関連情報を発信しています。ぜひ、フォローをお願いいたします。



@KOKORO_HAGUKUMU



KOKORO_HAGUKUMU





公益財団法人 パナソニック教育財団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル6階
TEL.03-5521-6100 FAX.03-5521-6200



<https://www.pef.or.jp/kokoro-forum/>

こころを育む 🔍

